幼児期の子育てに関する親の悩み *

今 井 靖 親・中 村 年 江**
（心理学教室）

要旨：幼児の養育にあたっている親が、子育てに関してどのような悩みや不安を抱いているかを、質問紙を用いて調査を行なった。食事に関する悩みと情緒に関する悩みが最も多かった。年齢段階から考えて、正常な発達の姿だと思われるような行動が問題視されている。祖父母との同居の有無によっても親の悩みに違いがあることが明らかになった。

キーワード：幼児期、子育て、親の悩み

子どもの心身の健康に関して、最近は児童相談所や病院などの専門機関をはじめ、ラジオや電話による相談が急激に増加している。これには、核家族化による親の孤立が一つの原因となっているように思われる。なぜなら、一般に三世代家族同居の場合には、子育ての困難さにぶつかっても、子どものことで家族同士が話し合うことができるのに、核家族の場合には、身近に育児に関する悩みや不安を相談する人がいないからである。もちろん親の孤立化は核家族のみが原因ではなく、各家庭と近隣あるいは地域とのコミュニケーションが欠けていることと無関係ではないであろう。

このような状況が子どもの養育にあたる親、とりわけ若年の母親たちに深刻な問題をもたらしつつある。そのうえ、1970年代半ばより、子どもの出生率は低下するばかりで、一夫婦あたりの子ども数は、遂に2人前後にまでなった。こうした少子化がまた家族集団のダイナミックスを大きく変化させ、子どもの情緒的問題を生じさせる一因ともなっている。

さらに近年、働く女性が増加し、今日では雇用者として働く女性は全体の60％を占め、1300万人以上にのぼっている。しかし、働く女性に必要な援助施設や制度の不備や家事・育児への夫の協力が十分でないなどの状況の中で、乳幼児を持つ母親が仕事を続けることの身体的あるいは精神的負担は極めて大きい。

いずれにしても、多くの母親たちが、子育てに関するさまざまな悩みや不安を持っていることは否定しえない事実であるが、こうした現状に適切に対処するためには、まず子どもの発達段階に即した問題を早期に発見し、早期に解決する機会を提供することが必要であると考える。

---

* An Analysis of Questionare on Worries and Anxieties of Childcare in Parents of Three-year-old Children

**Yasuchika IMAI and Toshie NAKAMURA
(*Department of Psychology, Nara University of Education, Nara*)

そこで、本研究では、3歳の幼児を持つ親の育児に関する悩みや不安の実態を明らかにするために、アンケート調査の結果を分析し、考察を行った。

方　　法

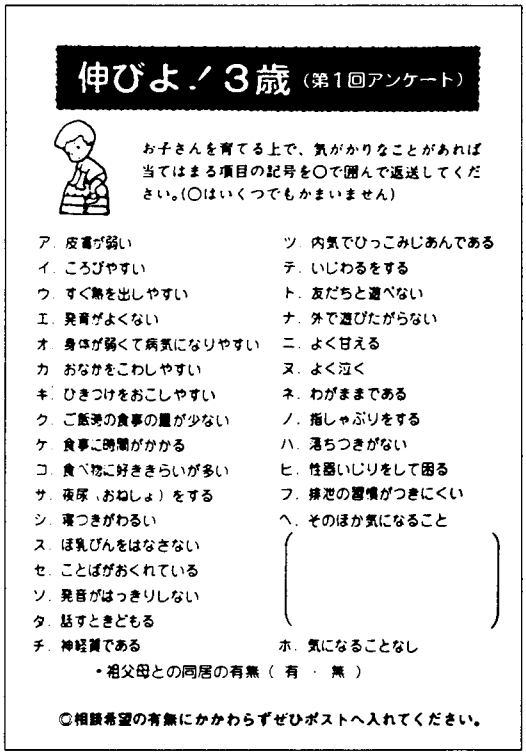
本研究では、奈良県家庭教育（幼児期）相談事業の一環として実施された「親の悩みについてのアンケート調査」の資料を、主管の県教委社会教育課の承諾を得て使用した。なお、この事業は、幼児教育のあり方が人間形成に大きな影響力をもつことにかんがみ、県が国の補助を受けて、3歳児を第一子にもつ親に対して通信、巡回、テレビ放送をとおして家庭教育に関する情報を提供するとともに、相談・指導を行う目的で、昭和49年度より昭和63年度まで実施されてきたが、平成元年度より、新しい組織の「すこやか家庭教育相談事業」に引き継がれ、対象者も、乳幼児を持つすべての親等となった。

(1) **調査の時期**　昭和63年6月30日～8月31日　ただし、比較のために、昭和58年度（昭和58年6月13日～7月31日実施）と昭和54年度（昭和54年6月25日～7月31日実施）のデータも使用した。

(2) **調査の対象**　奈良県下に在住し、その年度に2歳から満3歳になる幼児を第一子に持つ親等

(3) **調査の方法**　各家庭に送付する育児通信（封書）にアンケート用のはがきを同封し、該当する項目に○をつけるか記入を求めた。回収は郵送によって行われた。回収率と実際にデータ処理の対象になった人数は、昭和63年度で24.8％（1689人）、昭和58年度で21.2％（1577人）、昭和54年度で31.4％（2528人）であった。

(4) **調査の内容**　図1に示したように、幼児期の身体、情緒、言語、社会性の発達や、食事、習癖などに関する悩みや不安。昭和63年度においては、「気になることなし」の項目を含めて28項目（比較のために使用した58年度においては27項目、54年度においては26項目）。


伸びよ！3歳（第1回アンケート）

お子さんを育てる上で、気がかりなことがあれば当てはまる項目の記号を○で囲んで返送してください。(○はいくつでもかまいません)

ア．皮膚が弱い
イ．ころびやすい
ウ．すぐ熱を出しやすい
エ．発育がよくない
オ．身体が弱くて病気になりやすい
カ．おなかをこわしやすい
キ．ひきつけをおこしやすい
ク．ご飯等の食事の量が少ない
ケ．食事に時間がかかる
コ．食べ物に好ききらいが多い
サ．夜尿（おねしょ）をする
シ．寝つきがわるい
ス．ほ乳びんをはなさない
セ．ことばがおくれている
ソ．発音がはっきりしない
タ．話すときどもる
チ．神経質である
ツ．内気でひっこみじあんである
テ．いじわるをする
ト．友だちと遊べない
ナ．外で遊びたがらない
ニ．よく甘える
ヌ．よく泣く
ネ．わがままである
ノ．指しゃぶりをする
ハ．落ちつきがない
ヒ．性器いじりをして困る
フ．排泄の習慣がつきにくい
ヘ．そのほか気になること
（　　）
ホ．気になることなし

・祖父母との同居の有無（有・無）

◎相談希望の有無にかかわらずぜひポストへ入れてください。

図1　アンケート調査に用いられた郵便はがき

結 果 と 考 察

1．全体的な検討

図2は、昭和63年度、58年度、54年度の3か年について、項目ごとに解答を比較したもので

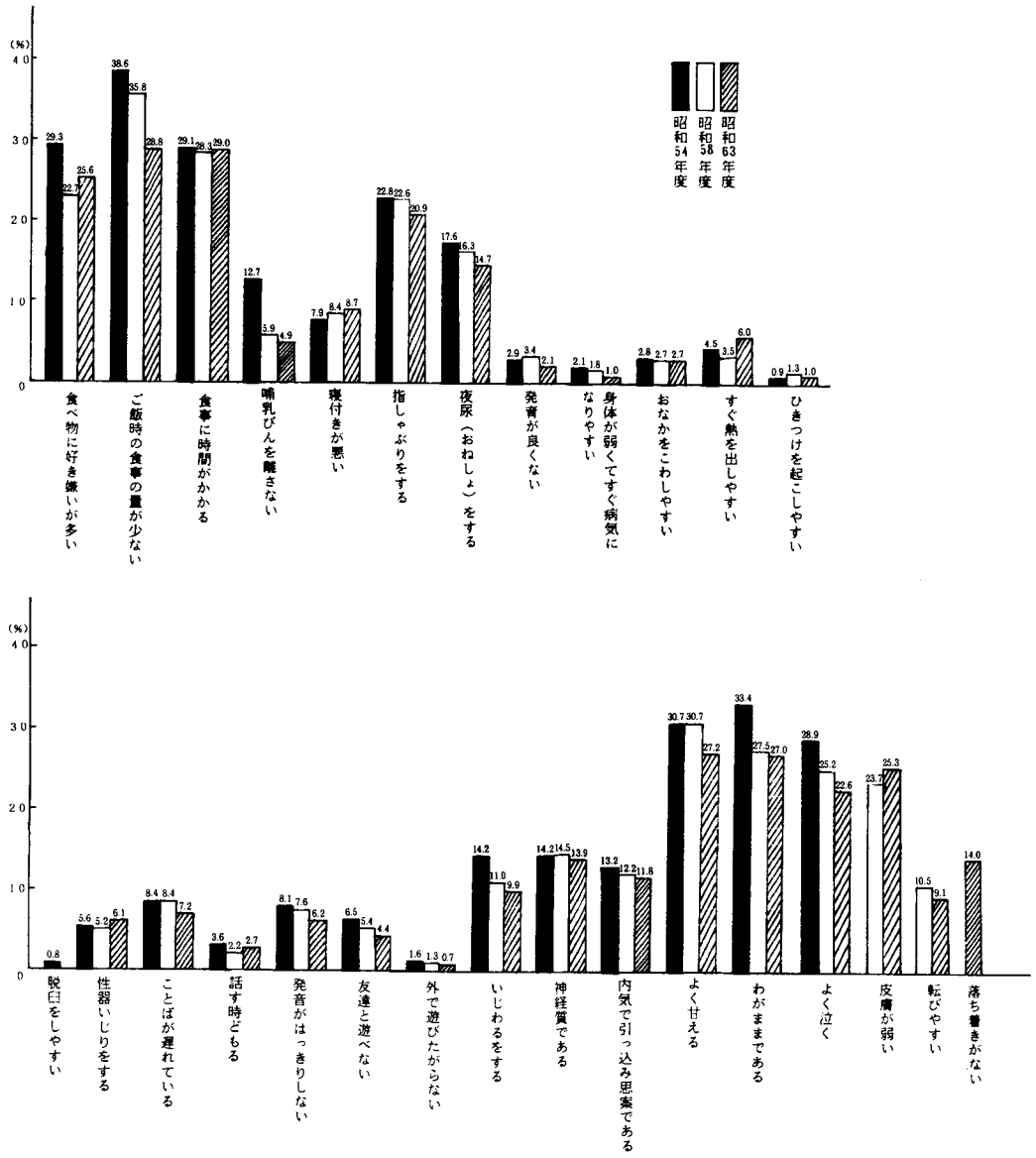


図2　調査項目の比較（昭和54年度、58年度、63年度）

ある。まず、「ご飯時の食事の量が少ない」という項目が最も多く、以下「よく甘える」、「わがままである」、「食事に時間がかかる」という3つの項目が接近した数値で続く。10年前、6年前という年度で比較しても、項目ごとの際立った差が見られないのが一つの特徴と言えるが、「漸増」、「漸減」、「横ばい」の3つのタイプに分けてみると、「漸増」は、「寝つきが悪い」と「皮膚が弱い」の2項目だけであるが、「漸減」は、「食事の量が少ない」、「哺乳びんを離さない」、「夜尿をする」、「発音がはっきりしない」、「友だちと遊べない」、「いじわるをする」、「よく泣く」など多くの項目にわたっている。また、「横ばい」は、「食事に時間がかかる」、「おなかをこわしやすい」、「神経質である」の項目に認められる。

回答する場合には、該当するものがあれば、いくつでも○をつけてよい、という方法をとったので、単純な比較はできないが、過去10年前、あるいは数年前と比べて、子育てに関する親の悩みは漸減している、と言えるのではないだろうか。

2．領域別の検討

(1) 食事に関して

調査項目を領域別にまとめて検討してみると、第一に、食事に関する悩みの数値が最も高いことがわかる。その中でも、「ご飯時の食事の量が少ない」は、過去10年間ほとんど変わりなくトップを占めて来ている。このような悩みには、子どもが食事をしっかりとらないと丈夫に育たないのではないか、という漠然とした不安と、せっかく作ってあげた食事を子どもが喜んで食べてくれない、という不満が混入しているように思われる。

幼児の飲食について母親に質問してみると、子どもが要求するままに間食をさせている、という答えが返ってくることが多い。実際、最近の親は、スーパーなどで購入したスナック類を袋ごと子どもに与えているし、ジュースをせがまれれば、量も含有物も考慮せずに、子どもに選ばせて好きなだけ与えている。

親は、子どもの摂取する食事の量が多いとか少ないとかを、どのような尺度にもとづいて判断するのだろうか。おそらく1、2歳時に食べていた量と比べると、体が大きくなった現在の量が増えていないと感じたり、育ち盛りの学童との比較で、少ないと思っているのではないだろうか。いうまでもなく、食事は量よりも質を重視すべきであって、間食を減らし、戸外での遊びを多くして空腹感を持たせるような工夫が必要であろう。

(2) 情緒に関して

この領域では、「よく甘える」、「わがままである」、「よく泣く」という悩みが特に目立っている。多くの親が幼児のこうした行動を扱いかねているという事実は、親がこの時期における幼児の心身の発達過程を十分に理解できていないことを示唆している。本研究の調査対象は、既に述べたように、その年に2歳から3歳になる幼児である。まだ母親のふところが恋しく、遊びも母親の膝を基地として発達していく年齢にある。しかも、この時期には、母親が第二子を妊娠していたり、第二子の出産直後だったりすることが少なくない。まだ幼い幼児が、自分の立場を不安に思い、寂しさを感じて、激しく母親を求めるのは当然である。

母親に甘えていたい幼児にも、そろそろ自立心が芽生え、心理的離乳も始まって、時に強い自己主張が見られるようになる。これがいわゆる反抗期の現象であるが、親が本気で拒否的態度に出ると大声で泣き叫ぶ、というのも発達特徴の一つなのである。特に、第一子の激しい情緒行動は、親にとって初めての経験であるだけに、具体的にどう対処すべきか、とまどうことが多いのだと思われる。

(3) 身体に関して

身体の健康面で、「発育が悪い」、「虚弱で病気になりやすい」、「胃腸が弱い」、「ひきつけを起こしやすい」というような悩みは、ほとんどが2～3％という低い数値を示している。しか

し、昭和58年度から追加した「皮膚が弱い」という項目だけが突出している点に注目したい。

最近は、冷暖房完備の家庭が多くなったため、霜やけやあせもなどが減ってきた反面、アトピー性の皮膚炎が多くなってきている。いっぽう、「身体が弱くて病気になりやすい」は、わずかながら減少傾向を示している。これは、妊娠に対する親の認識が向上し、丈夫な子どもが生まれ、虚弱体質の子どもが減少してきている証拠ではないだろうか。

次に、「転びやすい」の項目も10％前後の数値を示している。まだ足も腰も弱く、頭の大きい幼児が転びやすいのは当然かもしれない。しかし、這うことをしないまま立ち歩きをしてしまう最近の子どもの問題が、こういう形で表面化してきたのではないか、との懸念は残る。小中学生に見られる骨折の増加などを考え合わせると、クルマ時代に生まれ育って、昔ほどに歩くことをしなくなった現代の幼児には、これからも増える確立の高い問題項目と言えるであろう。

(4) 言語に関して

「ことばが遅れている」、「発音がはっきりしない」ことを心配している親は、常に全体の7～8％を占めている。言語の発達は、個人差が大きく、特にこの時期においては、一般にまだ語彙も乏しく、発音の不正確な場合が少なくないので、ことばが遅れているか否かの断定は慎重にすべきであるが、喃語期に親が十分に応答しなかったとか、発語期に十分な言語刺激が与えられなかった、というようなことが、遅れの原因になっている場合もあるかもしれない。

(5) 社会的行動と習癖に関して

2～3歳にかけて、幼児は外で友だちと遊ぶことを好むようになるが、「外で遊びたがらない」とか、「友だちと遊べない」というような問題では、親はそれほど悩んでいない。しかし、まだ相手の立場や要求を理解して、協調的に振るまうようなことはできないし、自己主張も強いのが、この時期の発達特徴である。「いじわるをする」という悩みは、こうした幼児期の行動にもとづくものであろう。

いっぽう、「指しゃぶり」や「夜尿」などの、いわゆる習癖に関する親の悩みは、15％から20％前後と高い数値を示している。これらの行動が、親たちにとっては、気がかりでもあり、世話のやける問題行動だと思われていることがわかる。しかし、「指しゃぶり」も「夜尿」も、まだこの時期に普通に見られる行動なのであるから、発達を考慮にいれた柔軟な対応が必要である。

先に指摘したように、「寝つきが悪い」は、この10年間で増加傾向を示している問題項目の一つである。このような年少の幼児にまで、最近の夜ふかしの生活の影響が現われているのであろうか。間取りの少ないアパートや団地などの居住条件から、子どもに静かな睡眠を確保できなくなっていることも考えられる。

3．祖父母との同居・別居による検討

図3には、昭和63年度における調査結果を、祖父母と同居しているか、別居しているかに分けて示した。

全体的な傾向は、3つの年度について行なった分析結果と大差はないが、問題項目別あるいは問題の領域別にみると、明瞭に差異の認められるものもあるので、以下に考察を行なう。

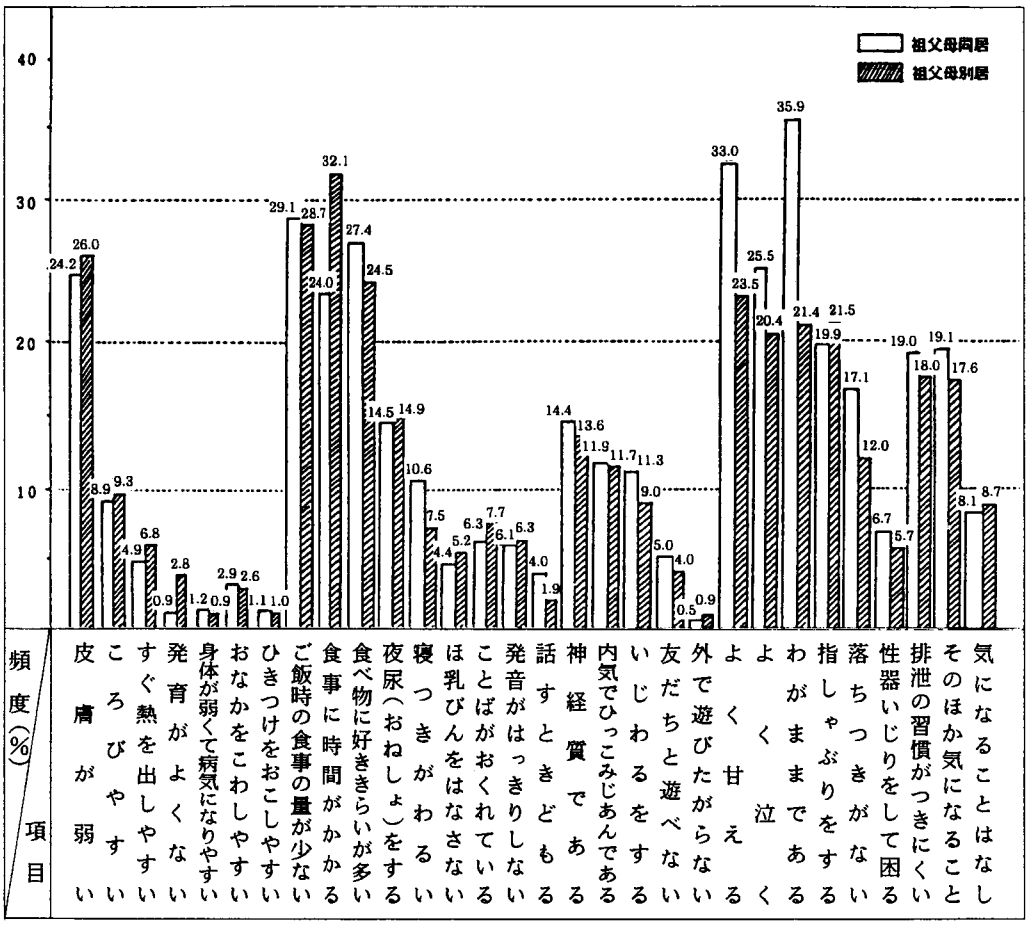


図3　祖父母との同居・別居による比較（昭和63年度）

(1)　食事に関して

「ご飯時の食事の量が少ない」や、「食べ物に好ききらいが多い」などは、祖父母との同居、別居による違いは見られないが、「食事に時間がかかる」という悩みに関しては、祖父母と同居している親よりも、別居している親のほうが深刻なようである。祖父母がいると、食事時に孫の世話をしてくれるので、親はずいぶん助かるはずである。これに対して、祖父母がいないと、特に母親は食事時は多忙である。家族全員の食事の世話をしながら、幼児のペースに合わせて食べさせるということは、気持ちの点でも、労力の点でも、かなりな負担にちがいない。

(2)　情緒に関して

祖父母と同居の場合、「わがまま」、「甘える」という悩みが、別居の場合と比較して極端に多くなっている。さらに、「よく泣く」という項目についても、同居・別居の差が目立つ。これから、孫をかわいがる祖父母の姿と、年寄りに甘やかされて、わがままになっていることを快くは思っていない親の姿が浮かんでくる。多分、わが子をかわいがってくれる気持ちがわかるだけに、嫁の立場から、若い世代の育児方針を強く主張することは控えているのであろう。

実際、アンケート調査の自由記述欄に、「祖父母が子どもをかわいがりすぎて、わがままになっていくのだが、嫁として、せっかく子どもをかわいがってくれているのに、不服を言えば家庭がまずくなるので言うわけにもいかず悩んでいます」という訴えがあった。

(3) 身体に関して

この領域では、「すぐ熱を出す」、「発育がよくない」、「皮膚が弱い」という項目において、祖父母別居の家庭のほうが、同居の家庭よりも悩みが多いという結果が現われている。子どもの日常の健康管理については、祖父母に頼る率が高いが、別居の場合には母親の負担が大きくなる。これが上記のような項目に関する訴えとなっていると思われる。

(4) 言語に関して

言語の面に関しても、わずかの差ではあるけれども、「ことばが遅れている」、「発音がはっきりしない」などの悩みが祖父母と別居の家庭に多く現われている。祖父母と同居の場合には、当然のことながら、子どもの話し相手をしてくれる家族が多くいる。特に幼児の場合には、祖父母を話し相手とした会話ができるので、言語発達上大きな利点となっているはずである。

(5) 社会的行動と習癖に関して

まず目につくのは、祖父母同居の場合に、「友だちと遊べない」、「いじわるをする」、「排泄の習慣がつきにくい」などの、いわゆる「非社会的行動」に関する悩みが多いことである。また、「寝つきが悪い」という項目においても、祖父母同居のほうが、別居の場合よりも高い数値を示している。情緒に関する悩みもそうであったように、祖父母にかわいがられて育つ幼児には、多少なりとも、基本的生活習慣や自立性あるいは自律性、協調性などの面に問題が生じることは否定しえない事実だと思われる。このような点に、年寄りとの同居に否定的な考えを生む土壌があるのではなかろうか。

順位	全体	祖父母と同居	祖父母と別居
1	食事に時間がかかる 29.0％ (2)	わがままである	食事に時間がかかる
2	ご飯時の食事の量が少ない 28.8％ (1)	よく甘える	ご飯時の食事の量が少ない
3	よく甘える 27.2％ (3)	ご飯時の食事の量が少ない	皮膚が弱い
4	わがままである 27.0％ (5)	食べ物に好ききらいが多い	食べ物に好ききらいが多い
5	食べ物に好ききらいが多い 25.6％ (4)	よく泣く	よく甘える
6	皮膚が弱い 25.3％ (6)	皮膚が弱い	指しゃぶりをする
7	よく泣く 22.6％ (7)	食事に時間がかかる	わがままである
8	指しゃぶりをする 20.9％ (8)	指しゃぶりをする	よく泣く
9	排泄の習慣がつきにくい 18.4％ (9)	排泄の習慣がつきにくい	排泄の習慣がつきにくい
10	夜尿（おねしょ）をする 14.7％ (10)	落ちつきがない	夜尿（おねしょ）をする

表1 「親の悩み」上位10項目（昭和63年度） （ ）内は昨年度順位

なお、表1には、全体と祖父母と同居・別居とに分けて、「親の悩み」を第一位から第十位まで示した。

以上、3歳児をもつ親の育児上の悩みや不安について、いろいろな角度から考察を行ってきたが、全般的にみて、親が子どもの行動に神経質になりすぎている、という印象をぬぐえない。2～3歳の幼児は、まだ親の予想や、期待どおりには行動できない発達段階にあることを十分に理解し、ゆとりをもって子どもに接してほしいものである。わが子の将来性、可能性を信じ、不必要な他児との比較をやめ、その成長を温かく見守りながら子育てをしていくことが、育児に関する不安や悩みから解放される最良の方略と言えよう。それとともに、若い親たちのさまざまな悩みを真剣に受けとめ、将来にわたって安心して子育てに励むことができるような社会的施策の重要性を強調したい。

要　　約

本研究の目的は、幼児の養育にあたっている親が、育児に関してどのような悩みや不安をいだいているかを調査し、考察を加えることであった。資料として、奈良県家庭教育（幼児期）相談事業において、3歳児を第一子に持つ親を対象に実施されたアンケート調査のうち、昭和54年度、昭和58年度、昭和63年度の3か年のデータが用いられた。

対象者全員に、子育てに関する悩みをチェックするための用紙（はがき）が配られ、郵送によって回収された。各年度において、実際に統計の対象になった人数は、昭和54年度で2528人、昭和58年度で1577人、昭和63年度で1689人であった。

主な結果は次のとおりである。

(1)　「食べる量が少ない」、「食事に時間がかかる」、「偏食がある」などの食事に関する親の悩みが最も多かった。

(2)　「よく甘える」、「わがまま」など、情緒に関する悩みも目立って多かった。

(3)　「ご飯時の食事の量が少ない」、「夜尿をする」、「友だちと遊べない」など、年ごとに減少している悩みがある反面、「寝つきが悪い」、「皮膚が弱い」など、最近になって増加傾向の認められるものがあった。

(4)　「哺乳びんを離さない」、「指しゃぶりをする」、「夜尿をする」、「転びやすい」など、2～3歳という年齢段階にある子どもならば当然と思われるような行動が問題視されていることがわかった。

(5)　祖父母と同居しているか否かによって、親の悩みに違いがあることが明らかにされた。特に、「食事に時間がかかる」は、祖父母と別居の場合に多く、「甘える」、「わがまま」などは、祖父母と同居の場合に多かった。

引　用　文　献

奈良県教育委員会　1979　昭和54年度　家庭教育（幼児期）相談事業報告書
奈良県教育委員会　1983　昭和58年度　家庭教育（幼児期）相談事業報告書
奈良県教育委員会　1988　昭和63年度　家庭教育（幼児期）相談事業報告書

付　記

本研究におけるアンケート調査の資料収集および整理については、奈良県教育委員会社会教育課の今井繁先生のご協力を得ました。心から感謝します。